

エンジニアがいなくても、どこまで作れるか。

AIコーディングツールで実際にできること・できないこと

この資料で分かること

- 非エンジニアが自分で作れる範囲の線引き
- 作り始める前に決めておく3つのこと
- うまく指示を出すための書き方
- 自作で止まる典型的な壁と、その越え方
- 外部に頼むべきタイミングの見分け方

オブティソース株式会社 / 2026年版

AIコーディングツールの登場で、**コードを書かない人でも動くものが作れる**ようになりました。ただし「何でも作れる」わけではありません。できるのは、業務を具体的に説明できる範囲までです。この資料は、**自分で作れる範囲と、頼んだほうが早い範囲**の線引きを整理します。

効くのは技術力ではなく**業務を言葉にする力**

AIに実装を任せられるようになった結果、詰まる場所が変わりました。今つまりくのは、書き方ではなく「何を作るか」を具体的に説明できないところです。業務が一番よく知っているのは現場の担当者なので、その人が自分で試せるようになった意味は小さくありません。

最初の1本は、自分の仕事から選ぶ

他人の業務を題材にすると、要件のずれに気づけません。自分が毎日やっている作業を選べば、できあがったものが正しいかどうかを自分で判断できます。小さく作って自分で使い、手応えが出てから人に見せる順序が安全です。

01

自分で作れる範囲

1人～数人が使う業務ツール、集計や転記の自動化、社内向けの簡単な画面。ここは自作が現実的です。

02

相談したほうが早い範囲

社外の人を使う、個人情報を扱う、既存システムと繋ぐ。判断が要る部分は経験がものを言います。

03

任せたほうがよい範囲

止まると業務が止まるもの、監査の対象になるもの。動かし続ける責任が伴います。

自作・相談・依頼の使い分け

対象	自作	考え方
自分の作業の自動化	向く	毎日の転記・集計・書式変換。仕様が自分の頭の中にある
部署内で使うツール	条件つき	使う人が数人なら現実的。増えるほど権限や履歴が必要になる
社外の人が触るもの	向かない	入力の想定外への備えとセキュリティの判断が要る
既存システムとの連携	向かない	相手側の仕様と障害時の扱いを決める必要がある
止まると困る業務	向かない	動かし続ける責任を誰が持つかの問題になる

作り始める前に決める8つのこと

- ✓ 誰の何を楽にするか

自分の作業から始めると、正しさを自分で判断できます。
- ✓ 今のやり方の手順

作る前に、現状の手順を箇条書きにしておきます。
- ✓ 扱うデータの置き場所

個人情報や取引先情報を含むなら、外に出さない前提で設計します。
- ✓ 失敗しても困らないか

本番データでいきなり試さず、写しで動かします。
- ✓ どこまでできたら合格か

終わりを決めておかないと、際限なく作り続けます。
- ✓ 使えなくなったときの代替

手作業に戻せる状態を残しておきます。
- ✓ 他の人に説明できるか

自分しか分からないものは、休んだ日に止まります。
- ✓ 相談する相手はいるか

詰まったときに聞ける先を先に決めておきます。

小さく1本目を作る

1つの作業を自動化するところから。全体の仕組みは後で考えます。

手順を先に書き出す

AIへの指示は、業務手順の説明そのものです。

写しのデータで試す

本番に触る前に、コピーで動かして確かめます。

線を越えたら相談する

社外・個人情報・既存連携。ここからは経験が要ります。

非エンジニアでも、**自分の業務を言葉にできる範囲は自分で作れます**。難しいのは技術ではなく、どこまでを自作にするかの線引きです。当社では、その線引きのご相談から、必要な部分だけの支援までお引き受けしています。

相談は無料です

現状を伺ったうえで、やらない方がよい場合はその理由をお伝えします。／ optisource.co.jp